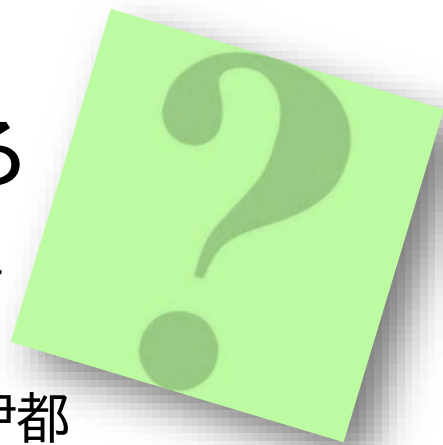


立場が変わると何が見える



～その10 対人援助者の姿勢～

坂口 伊都



はじめに

今年の夏も猛暑。朝8時の外気温が34℃と、最高気温でも不思議ではない気温です。今後、夏の気温はどこまで上昇するのでしょうか。未恐ろしさを感じます。

8月2日～4日に開催された京都国際社会福祉センター家族療法ワークショップ STEPⅡにスタッフとして関わらせていただきました。受講生は23名。

1日目 13:00～18:30

2日目 9:30～18:30

3日目 9:30～15:30

という長時間の研修でしたが、気がつけば、あっという間に終了時間が来ていました。

私は、「家族面接の質問からの展開方法について」を担当。

2日目に受講者が4つのグループに分かれ、それぞれ問題を抱える家族になりきり、各グループ分の家族面接を録画します。3日目の担当時に、その中の1グループの録画を見ながら、振り返り、面接者に別の質問を考えてもらい、その場で模擬家族に新たな面接を実践し、また振り返るワークです。

家族面接の初回面接では、ジェノグラムを描きながら、家族の名前、漢字、年齢、職業等を尋ね、3世代を描いていくのが基本です。それは、私の中でテンプレートのようなものになっています。受講生の皆さんが、基本情報を得ることに悪戦苦闘している姿を見て、改めて慣れていないと難しいものなのだとわかりました。

具体的には、

「どなたからでも結構ですので、家族の紹介をしてください」と面接者が促します。

「では、私から。父の〇〇です。」

「お父さんですね。(白紙にジェノグラムの口を書く)〇〇さんの漢字は？年齢は？お仕事は何をされ

ているのですか？」

とジェノグラムにお聞きした情報も書き込みます。

「次は、母の△△です。」

「お母さんですね(ジェノグラムに○を足す)。漢字は？おいくつですか？お仕事は？」

この手順で尋ねていくと家族の基本情報が得られます。家族と一緒にジェノグラムを描いていくと、完成させたいと思うようで、丁寧に教えてもらえることが多いです。

受講生の皆さんも家族の基本情報を聞こうと試みます。

「どなたからでも結構ですので、家族の紹介をしてください」

「では、私から。父の○○です。隣が母の△△、長男の□□…」

と、サラッと家族の紹介が終わります。

違いは、ジェノグラムを家族に見せながら描いているか否かです。

ジェノグラムは、内部情報として使用しており、家族と描くことに抵抗を感じてしまうと話す受講生がいました。

それぞれの当たり前は、同じではないのですね。家族と一緒にジェノグラムを描くと、そこにいるメンバーが皆、ジェノグラムに気持ちが向かい、家族の情報を伝える事に抵抗感が下がること、その場で聞けなかった情報も後で話題にあがれば、ジェノグラムを見返しながら自然に質問ができることを伝えたら、「こういう使い方もあるのですね」と驚いていました。



何故、家族の基本状況を踏まえたいかという、人の生活は家族の営みがあり、その上に様々な症状が出てくるからです。今回の模擬家族事例では、子どもがモノを盗むという行動が問題にされ、面接者の多くがそこに焦点をあてていました。その行動に家族システムがどう影響しているのかに興味を抱くことが最初の一步です。

今回は、いろいろな対人援助職がありますが、その姿勢について考えていきたいと思います。どうぞ、最後までお付き合いください。

犬と猫と

以前に 4 歳のネコが亡くなった時のことを書きました(対人援助学マガジン50号)。その時は、4歳という若さで逝ってしまい、とても悲しかったことを思い出します。動物と暮らすということは、病気や看取りも含まれることは頭ではわかっていますが、いざその場面になると冷静でいることは難しい。

我が家には、15歳と14歳の老犬と7歳の猫がいます。14歳の老犬の目は、ほとんど見えていません。15歳の長老犬は、元気で良く吠え、食欲旺盛。猫は、マイペースに犬と違う場所で良く寝ていました。

ある日、一番元気だった長老犬が吐いて、便も緩い。何か悪いものでも食べたのかな？翌日になるとふらふらとして、まっすぐに歩けない。顔が大きく右に傾いて、見るからに変です。何も食べたがらず、急に亡くなってもおかしくないように見えました。

今年から行き始めた動物病院で診てもらうと、

「これは、突発性前庭疾患の可能性が高いですね」と図鑑のような教科書を見せてくれました。

平均感覚をつかさどっている前庭神経に異変が起こる病気で、老犬に多いそうです。眼球が揺れ、ずっと船酔いをしているような状態になっていて、犬なりに平衡感覚を保とうと調整して顔が傾いていく。何が原因で起こるか、わかっていないとのことでした。

「先生、この病気で死んでしまうのですか？」

「死なないです。落ち着いていくまでに個体差がありますけどね」

「それでも治療は、対処療法しかできません。血液検査をしてもこの病気では何も数値として出ないのですが、この病気でない可能性は捨てきれないので検査をすることもできますが、どうしますか？」

こちらが尋ねる前に、

「血液検査をすると、だいたい 5,000 円ぐらい。点滴と吐き気止め、下痢止め、念のためのステロイドを少しだと、これくらいの値段になります」

と教えてもらえました。血液検査はせず、処置をして、明後日の診察受診となりました。受診も 19 時 30 分までに入ればいいので、仕事の後でも駆けつけられます。

犬は、フラフラしながらも吐き気止めが効いてく



ると、ささみなら食べられるようになり、ドックフードも嫌がらなくなっていました。やれやれです。

次は、猫の呼吸がいつもと違う？

お腹で息をしているように見え、呼吸も早い気がする。食欲も落ちているので、犬の診察時に一緒に予約を入れました。

犬は体調が戻りつつあり、様子を見るだけで終わりました。

猫の方は、きょうだい猫が同じような状態で入院後すぐに亡くなっていることを伝え、血液検査とレントゲンを撮ることを勧められました。

「犬は元気になったので、治療なしで 880 円。猫の方は、血液検査、レントゲン、胸に水が溜まっていたらそれを抜く処置で、16,000円ぐらいかかってしまいますが、大丈夫ですか？」

レントゲンを撮ると胸は真っ白。水か血液が胸に溜まっている可能性を指摘されました。

この子もきょうだい猫と同じようにあっけなく亡くなってしまうのだろうか。

医師は、血液検査の結果を見ながら、可能性をいろいろと聞かせてくれました。

「血ではなくピンクかがった水の可能性が高いと思われます。まずは水を抜いて、経過を見ながら治療を考えます。水を抜いていく途中で、何かあれば呼びに行きますね。」

抜いた水は、ピンクかがっていました。また呼吸が早くなったら連れてきて下さい。経済的な負担ができるだけかからないように相談しながら進めていきたいと言ってもらい、重い気持ちはありながらも、少し気が楽になっている部分がありました。

気づけば、夜の9時。2 時間程、経っています。老犬は元気になりましたが、若い猫の方は重症でした。

病気、死が目の前にやってきても、何とかなる気がしたのは、何故なのでしょう。



未来を感じる対応

4歳で亡くなった猫の時は、悪性リンパ腫で抗がん剤治療を勧められました。毎週、動物病院に通う必要があると言われ、経済的負担も大きく、ただただ重い空気の中で過ごしていました。

結果は、入院して抗がん剤治療を2回終えた後、亡くなりました。

今回は、経過観察中で、これから先どれくらい猫の寿命があるかわかりませんが、動物病院からの帰り道、何とかやっていけそうな気がしました。前回と何が違うのでしょうか。悪性リンパ腫とは言われていないことでしょうか。前回の病院は通うことがストレスでしたが、今回の病院には行きたいと思う私がいいます。

前回の病院は、大学病院のように治療中心で話が進み、今回の病院は町医者のように家族の生活を気にかける比重が高かったのではないかと感じます。

家族療法ワークショップの「家族の営みがあり、その上に様々な症状が出てくるものだ」という言葉を思い出しました。

対人援助職は相談の際、子ども、しょうがい、高齢者等中心に置くべき人を考えます。それは、それでいいのですが、問題行動にばかり目が行き、その周りにいる家族のことも意識的に見ようとできているかいないかの違いに似ています。

例えば、虐待をしている親に対して怒りを感じることがあります。あの親は子どものことを何も考えていない、毒親、身勝手、こんな親と一緒に暮らすよりも分離した方が子どものためだと思い込んでしまう。そうすると、親との対峙が深まって話し合いにならない状況に陥る。子どもの立場だけでなく、親の視点も含めた家族の負担感や感情を含めて理解しようとする、親の信頼を得ます。対人援助職を信頼するプロセスを今回、私は味わいました。

金銭を含めた細かい説明と将来を見越した選択肢をいくつか提示してもらい、それを選んだ場合の可能性、医師としての意見も聞かしてもらいました。

医師の率直な意見を聞いたうえで、家族で検討する。猫の体調、白血病ウイルス発症リスク、今の小康状態、そして金銭面、それらを鑑みて家族の決断を出していく。

家族での話し合いはスムーズに進み、家族面接のバックスタッフからスーパービジョンを受けているようだと感じました。

スーパービジョンは、自分が受け持ったケースについて助言や指導を受ける場ですが、教えを乞うというスタイルになると、理解が深まる気がしません。

スーパーバイザーから最初に「あなたは、どうしたい？」と聞かれると、

スーパーバイザーの意図にあった答えを求められているという気持ちが先立ち、そこに気持ちを奪われる自分に嫌気がさします。

家族面接のバックスタッフとのやり取りはまず、

「家族面接してみて、どんな印象をあなたは持った？」と聞かれることが多いです。

直接に向かい合ったファミリーセラピストの印象を聞き、バックスタッフの席から見えた率直な意見、聞きもらしていないかの確認をしながら、家族について皆で語らう。

このスタイルは、横並びで意見を出し合い、その結果、家族への理解が深まるから好きです。

当事者家族としては、現状打破できる、具体的な行動があると救われます。

それは、養育里親をしていた時に度重なる里子のトラブルで疲弊した時の経験から感じたことです。

家族面接には、「宿題」があります。問題を抱えた家族に変化を起こそうとする試みです。

上手く回っていない現状に変化をつけてみるということが目的です。少し頑張ればできる小さな変化を考えます。それをして、家族の営みがいい方向にいけば続ければいいですし、上手くいかなければ違う方法を探すだけです。

今回の医師の言葉には、率直に一緒に考えようとする姿勢を感じました。前回の悪性リンパ腫の治療の時は、治療が上手くいかない可能性もあるので、そこは事前に了承するようにという扱いがあり、人間の医療モデルと同じですが、家族としては突き放された印象を持ちます。

宿題にあたる部分は、具体的な治療法です。別の高度医療をしている病院を紹介してもらい、精密検査、手術をしていくか、胸に溜まる水を抜きながら進めていくかの選択肢になりました。



猫は、どこまで元気でいてくれるか、急変するのかわかりませんが、心構えはできました。信頼できるドクターと一緒に温かく家族で支えていきたいと思います。